

壁

濱野京子

画・大島千明



少年の暮らす町の真ん中には、高いガラスの壁がありました。

「あの壁のむこうには何があるの？」

そう聞いた時の大人の答えはきまっていました。

「悪気があるんだよ。悪気がこっちにこないように、あの壁が作られたんだ。だから、壁に近づいてはならないよ」

悪気。それはとてつもなく不穏な響きをもっていたので、聞かたびに、少年はぶるっと身をふるわせました。それから、どうか、その悪気というものが、こちらにきませんようにと、心から祈るのです。

ガラスの壁は、どこまでも続いていました。ずっとたどっていったら、世界の果てにまで行ってしまいかもしれない、と思うほどに。

悪気とは、悪い空気のことだと少年が知るのは、少し大きくなってからのことでした。悪い空気になると、病気がかかります。その病気は、人から人へとまたたく間に広がってしまうのです。それで、大人たちは、悪気がやっこないようにと、この高いガラスの壁を築いたのでした。

その後も少年は、時折壁を見にきました。大人たちからは、壁に近づかないようにと言われていたのですが、なぜか気になってしかたがなかったのです。

「壁はいつできたの？」

「ずいぶん前のことだよ。いずれにしても、壁のむこうのことは考えない方がいいよ」

壁の表面は、長年月を経て無数の傷や汚れで濁り、壁のむこうをはっきりと見通すことはできません。じっと目を